島原工高新聞

平成２６年
５月２３日発行

島原工業高校
新聞部

２０周年記念誌から島工の歴史を振り返る

本校は今年で創立５２年目を迎えます。５０年と一言で言うのは簡単ですが、開校から現在に至るまでには、先輩や先生方を始めとした多くの方の尽力がありました。

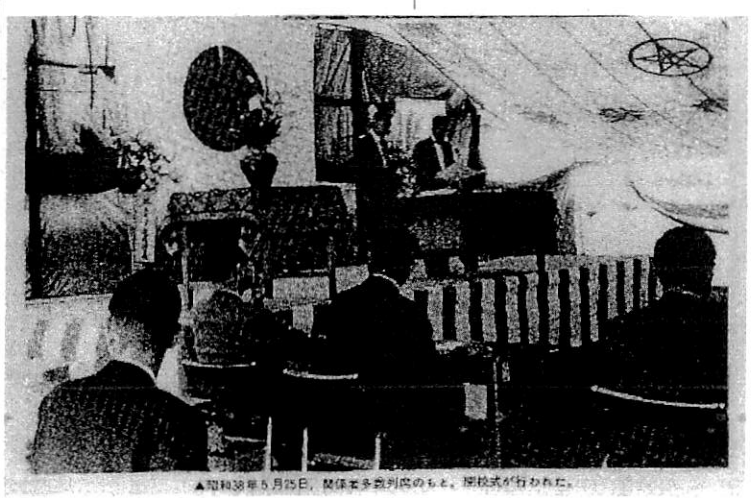
そこで、創立記念日をきっかけに、皆さんに島工の開校当時に思いを馳せてもらいたく、この新聞を発刊する運びになりました。

「創立２０周年記念誌」には、開校当時の様子が詳しく書かれてあり、出来たばかりの学校の苦労がありありと綴られています。

今年は、就職開拓にまつわるお話です。

今でこそ、早い内定と就職率を県下に誇る島原工業高校ですが、学校ができたばかりの昭和４０年代、ただでさえ情報の少ない時代に、実績も何もない西の果ての一工業高校を知ってもらうために、当時の先生方が大変なご苦労をされたことがうかがわれます。

新たな時代を担う皆さんが、本校の歴史の重みをしっかりと引き継いで、さらなる飛躍をすることを願っています。



▲昭和38年5月25日、関係者多数列席のもと、開校式が行われた。

仮設テントでの開校記念式典の様子

苦労した就職開拓　技術職は日本一

小　野　俊　英

それは昭和３８年当時、高校の就職試験は５月頃から始まっていたのであるが、来年度の就職開拓へとそれぞれの教師が入れ替わり全国へ出張していた時分のことである。その一員として私も関東・関西・中国へと廻った。革靴も敗れかかり、足先にいくつものアザができ、汗だくの哀れな田舎者の姿を丸出しだった。

「島原工高。そんな学校は聞いたことがない」

関東地方では工場が多く、２０～３０メートル歩いては軒並みに工場の玄関を訪ねた。その時言われたことは今でも忘れ得ない。それは

「島原工高はどこにあるのか。」

「九州のどこや！そんな学校は聞いたことがないぞ。」

「天草か」

と言われて、こちらの汗流した姿を真剣に受け取ってくれなかったのだ。「国立公園雲仙」のことを話したが、今の時代とは違って「雲仙」さえも知られず腹立たしくなり、帰る時、玄関でバタバタと地踏みしたこともあり、靴底もよけいに傷ついた。

地元採用優先の企業、相次ぐ

また、関西広島では昭和４０年前後は企業誘致で地元とのトラブル、補償問題などがあり、従業員はすべて地元優先で九州からの採用は全く考えていないとのことで空振りの状況だった。この時、私の経験から「地元ばかりの人員構成では企業の発展は望めず、外国企業進出などで困る事態が起こります。広く人材を採用されて将来を期待されてはどうか」と吹いたこともあった。「これで島工は就職できるだろうか。情けない限りだ。何とかして島原半島にも企業誘致の方策はないものか」と嘆きながら帰ったのだった。

昭和４０年、いよいよ島工第１期生が３年になってＡ組の担任となった。これでは４月から泣かされるのではと心配していたが、案外、現在の一流企業から技術職としての求人をうけ、予想外の成績を収めて現在まで続いている。また、４６年のドルショック・４８年のオイルショックのあおりもほとんどなく、ある会社では技術職は全国一といわれ、どの工場を訪ねても受付の女子まで島工の名を知っている。某会社からは島工２学級全員でも欲しいという話を受けたこともあった。大変有り難いことであった。パイオニアスピリットの実績をあげている同窓会先輩に感謝しなければなるまい。（以下略）

※年号等出典より加筆・訂正があります。

創立当初のグラウンド整地。全校で取り組んでも整備終了まで何年もかかった。